

1. 岩手県の「桑クラスター」に対する岩手大学地域連携推進センターの協力

～岩手大学地域連携推進センターの取組み～

1 岩手大学地域連携推進センター

1.1. 食料産業クラスターに関する情報交換会

岩手大学地域連携推進センターとの出会いは、2006年6月21日に、岩手県庁で行われた食料産業クラスターに関する情報交換会の場であった。そこで、岩手県農林水産部流通課、商工労働観光部商工企画室(食産業特命課)、各地方振興局、岩手大学地域連携推進センターと(社)食品需給研究センターとの間で、食料産業クラスターに関する情報交換を今後とも定期的に行っていくという話になり、8月9日には岩手県食品産業協議会も加え、第2回目の情報交換会を行った。

この場に出席していた地域連携推進センターの近藤孝客員教授と小川薫助教授より、地域連携推進センターの協力する桑クラスターが紹介された。

1.2. 岩手大学地域連携推進センターの概要

地域連携推進センターは、地域共同研究センター、生涯学習教育研究センター、機器分析センター、知的財産本部、インキュベーションラボを再編し、2004年4月に設置された施設で、地域と岩手大学を結ぶ窓口となっている。企画管理部門、リエゾン部門、知的財産移転部門、機器活用部門、生涯学習・知的資産活用部門からなり、岩手大学における教育研究の進展に寄与するとともに、知的財産を産業界や住民等に還元し、地域振興と住民の生涯学習に貢献することを目的としている。

岩手大学地域連携推進センターの組織

部門	業務内容
企画管理部門	産学官民連携企画、外部資金獲得企画、管理運営等
リエゾン部門	企業と研究者のマッチング、共同・受託研究企画等
知的財産移転部門	知的財産創出・管理・活用、インキュベート支援等
機器活用部門	研究・分析機器の共同利用、分析・計測支援等
生涯学習・知的資産活用部門	各種講座企画、講師派遣、人材育成等



岩手大学地域連携推進センター



小川薫助教授(左)と近藤孝客員教授(右)

2 桑クラスターと岩手大学地域連携推進センターのかかわり

2.1. 桑の葉の食品利用

第2回情報交換会を岩手県庁で行った後、近藤客員教授、小川助教授より、岩手大学地域連携推進センターを案内してもらった。そこで、桑クラスターの取組みに知的支援という形で協力している鈴木幸一教授と三浦靖助教授にお会いし、お話を伺った。

鈴木教授の専門は昆虫機能利用学で、カイコ、天敵などの資源昆虫が有する各種機能の解明、その利用技術の開発を行っている。その鈴木教授によると、岩手県では、以前は盛んであった養蚕が衰退し、現在放置されている状態の桑畑が目立つようになっており、その利用が図れ

ないかということで桑の葉の研究を始めたということのようだ。桑の葉は20世紀までは、カイコの食べ物であったが、21世紀には人間の食べ物にできないだろうかということで、桑の葉に含まれる機能性成分の研究をスタートした。そこで、協力しているのが食品健康科学を専門に研究している三浦助教授である。三浦助教授の研究によると、どうやら、桑の葉には血糖値を下げる成分が含まれているそうである。まだマウスを使った実験レベルなので、今後、ヒト試験による医学的な研究も必要となるという話である。

◇

◇

2.2. 桑クラスター

◇

この岩手大学による研究成果を利用して、食品開発を手がけているのが旧花泉町の産業開発公社である。桑の葉を粉末にし、うどんに練りこんだ「桑の葉入りうどん」を販売している。荒れ始めた桑畑を養蚕以外で利用していこうという発想である。

ただ、うどんに練りこむためには微粉末にする必要があるが、岩手県には凍結乾燥装置やその後微粉末にする粉砕装置がなく、県外の企業に委託して桑の葉の微粉末をつくってもらっている。桑の葉の凍結乾燥、粉砕も含めて地域内で行うことができれば、現在未利用資源となっている桑の葉を利用した新たな産業クラスターの形成にもつながると思われる。

鈴木教授は、島根県において桑の葉を利用したプロジェクトの立ち上げにも協力しており、岩手大学の地元、岩手県においても、桑クラスターの形成を夢見ている。鈴木教授は、桑畑の栽培管理技術が失われる前に手を打つ必要があると指摘している。現在、県内では遠野市や隣県の八戸市でも桑の葉の利用に興味を示しており、今後の展開が期待される。



三浦靖助教授(左)と鈴木幸一教授(右)

(文：社団法人食品需給研究センター 藤科智海)